

普天間の芸能

◆普天間のマールアシビ

ムラアシビはムラの神々に五穀豊穡を感謝し豊年を祈願する行事で、各ムラで盛大に行われました。普天間では丑・巳・酉年の旧暦八月十三日～十七日に、普天間宮の境内に仮設舞台を設置して行うか、ムラヤー（現在の公民館）で行いました。開催した年から数えて次の開催年まで5年あることから五年マールと呼ばれています。

当日は昼間にムラヤーまたは志礼^{シユ}からバンクのある普天間宮の鳥居の前まで、旗頭、獅子、ミルク(弥勒)、と連なって道ジュネーが行われました。先頭は旗頭、獅子のどちらかでした。舞台では男性のみで組踊・歌劇・端踊・棒などが演じられました。

※志礼(屋号)：普天間のニーヤー(根屋)



松並木旗頭(松永高元氏写真資料)

野々村孝男氏提供

普天間は海外移民が多く、普天間青年団が移民先のフィリピン・ダバオで1937(昭和12)年に行ったマールアシビの記念写真が残っています。

◆普天間の獅子舞

普天間の獅子は約450年前に尚元王から村興しの神として贈られたとされ、村の守り神として五穀豊穡・子孫繁栄・災厄除けを祈願して、旧暦の七月十三日と十五日、八月十五日に奉納舞が行われました。演舞に大きな首振り・四肢の屈伸・四方への威嚇の突きが多く取り入れられていることや、芝居的な足の上げ方、ユーモラスで細やかな芸などの特徴があります。

1955(昭和30)年に戦後の初代獅子加那志が誕生し、普天間の獅子舞は復活しました。現在の獅子は3代目で初代獅子は普天満宮に奉納されています。



普天間の獅子舞

呉屋善昭氏撮影

普天間古集落

キャンプ瑞慶覧内、普天満宮西側に広がる戦前の普天間集落跡です。普天間の旧集落は前普天間^{ケンフティマ}(現在の普天間小学校付近)に始まり、後に後普天間^{クシフティマ}(普天満宮西側)へ移動したと伝えられています。

発掘調査で沖縄産陶器や本土産磁器といった生活用品、戦前の屋敷跡、井戸跡、郡道跡、フール(豚小屋兼トイレ)跡などが見つかりました。



戦時に隠された陶磁器



フール跡



井戸跡

郡道は大正時代に整備された道路で、普天間宮から伊佐方面へ伸びていました。幅約4.5m×長さ約180mの範囲が発掘され、一部は街区公園で現地保存される予定です。現在、一部を剥ぎ取って市立博物館にて展示しています。



郡道跡

編集・発行/宜野湾市教育委員会
〒901-2203 沖縄県宜野湾市野高1-1-2
TEL 098 - 893 - 4430

編集協力/株式会社文化財サービス
〒901-2222 沖縄県宜野湾市喜友名1-11-15-206

印刷/株式会社沖産業
〒901-2221 沖縄県宜野湾市伊佐2-1-1



普天間

ふていま

歴史文化遺産マップ



普天間について

ほうおん方音で「フティマ」と呼ばれ、宜野湾市の北東端に位置します。古くから交通の要所で普天満宮・普天満山神宮寺への参拝客も多く訪れ、廃藩置県後は中頭を中心地として栄えました。

集落の南から西にかけて耕作地が広がり、黒糖生産、牛・馬・豚・山羊などの飼育、帽子編みも盛んに行われました。獅子舞は毎年、ムラアシビは五年周期で華やかに行われました。

沖縄戦により普天間集落は大部分を米軍用地として接収され、かろうじて普天間宮と普天間山神宮寺周辺が残っているだけでした。帰る場所を失った人々は軍道5号線(現国道330号)東側にテント小屋を建てて暮らしを再開させました。1946(昭和21)年9月より他字に居住許可が出されましたが、普天間に残留する人々や村外からの転入者が増え続け、1951(昭和26)年に普天間小学校南側を普天間二区として行政区を新設しました。また、1953(昭和28)年には5号線西側が居住地域として開放され、店舗や民家が増加したので1964(昭和39)年に普天間三区が誕生しました。



戦前の字普天間集落イメージ図

宜野湾市全域図

